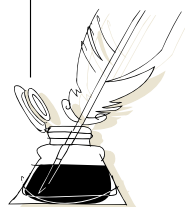


人生讃歌

小樽
山博

年の瀬の雪



日の暮れた窓の外を、年の瀬の雪が降る。風はない。漏れてゆく光の中を、雪は簾を垂らしたように流れ落ちる。ぼくは書斎の机にもたれて降る雪を見ている。窓ガラスに写るぼくの老いた眼が、遠くを見ている。その顔に次々と思いが降りはじめ。

★
ぼくは八歳だった。ある日、押し切りという道具で馬に食べさせる飼葉を切っていた。ぼくの仕事だった。五十センチほどの鉄の刃の上に草を置き、上から柄を押し下げて切るのである。一人では無理なので隣の家の六歳の男の子に頼んだ。ぼくがしがんで両手に持った草を刃に置き、柄を男の子が押し下げた。

切つてる途中、突然、ぼくは右手の人差し指が熱くなって飛び上がった。指先から血が吹き出ている。仰天、大声で泣きだした。泣きながら畑にいる両親のところへ走った。ぼくは右手人差し指の爪の半分から先を失い、それ以来、人の眼からその指を隠すようになった。八十年たっても、まだ隠そうとする。

★
小学四年の冬、学校帰りに猛吹雪になり、一瞬先も見えない白い闇だった。同じ方向に帰るぼくら男の子三人と女の子二人は腕を組んで歩いたが、唸り狂う吹雪に吹き飛ばされそうで

恐ろしく、道路わきの千葉さんの家へ走り込んだ。すると千葉さんのおばさんは「よく来たよく来た、さあさあ入れ入れ、こんなとき出歩いちゃ駄目だ、あぶないぞ、さあさストープであつたまれ」と茶の間へ入れてくれた。そしてストーブに薪を焼く、ぼくら五人に温かい汁粉を食べさせてくれた。うまかった。ほんとにうまかった。

★
窓の向こうを師走の雪が降る。無数の白い糸が流れ落ちるように雪が降り、遠い記憶が降る。中学三年のときクラス四十人で街の映画館へ「ああ無情」を見に行くとき、担任の先生に学級委員長のぼくが引率して行けと言われた。入場料は十円だったが、ぼくはおカネがなかった。前の晩、父母が借金が多いことで喧嘩して、映画代のことを言い出せなかったのだ。それでぼくは先生に腹が痛い嘘をついて早退、帰るふりをして映画館の裏の林に隠れて寝ていた。映画なんか見なくても平気だったが、田舎から転校してきたぼくが学級委員長に選ばれたのに、みんなを引率して映画館へ行けなかったのがせつなかった。

★
十六歳、高校の寄宿舎は自炊で自分で煮炊きした。親からの仕送りが遅れて食べる物がなく、夜中、空腹のあまり近くの農家の畑からジャガイモをとってきて煮て食べた。助かった。それから四十五年後、ぼくの講演をききに来てくれた女性がその農家のお嬢さんだった。当時、中学生だった彼女によると、御両親はぼくら寮生がとっていることを知って毎年、知らないふりをして作っていたと言った。それを聞いてぼくは絶句、天を仰いだ。

★
高校一年、寄宿舎で自炊のため教室での昼食は水を飲んだ。午前の授業中、前の席の小寺が机の下を通して弁当をよこす。彼

は汽車通学だ。ぼくはその弁当を半分食べて返そうとすると小寺が「全部食っていいんだからな」と言う。「ほんとにいいのか?」とぼくは全部食った。うまかった。昼、小寺はパンを買って食べた。秋、ぼくら生徒がトラックの荷台に乗って山から土を取ってきてグラウンドへ敷いた。帰ってきてぼくら八人ほどが降り、小寺も降りかけたときトラックが動き、小寺は振り落とされて車輪の下へ入った。ぼくは絶叫しながら彼に向かって走った。小寺は十六歳で死んだ。彼は母二人、子二人の二人だけの家族だった。

★

年の暮れの雪が降る。重い記憶が降る。就職先がなくて怯え



挿絵/中江潤一

ていた苦小牧工業高校電気科三年の二月、やっと北海道新聞の文選工に就職が決まったとき、田舎で農業をしていた父が喜びのあまり昼間から焼酎を飲んで酔っぱらい「うちの息子が道新に入った」と村中を触れ回ったということを後で聞いたとき、ぼくはとても幸せな気持ちになった。

★

高校を卒業、北海道新聞へ勤めるため札幌の下宿へ入った三月三十一日のことだ。急に腹部に激痛が起こつて市立病院へ行くと、即、盲腸の手術となった。会社への入社式は明日の四月一日なのだ。眼の前が真っ暗になった。会社へはそのことを伝えた。病院から入院するとき米一升と毛布を持参せよと言われたがぼくには無く、その日会ったばかりの下宿のおばさんに借りた。手術後ぼくは高熱が続き、おばさんは「晩中、付き添ってくれ額を冷やしてくれたのである。そして十五日間も入院、道新への入社は四月十五日のぼくの誕生日になった。入院費も一時、下宿のおばさんに立て替えてもらった。それから七十年たつが、ぼくは下宿のおばさん・佐藤さわさんを忘れない。忘れるわけにいかない。

★

窓の向こうを師走の雪が降る。追憶が降る。窓に写る老いたぼくの顔は父にそっくりだ。父は福島県で十五歳のとき四歳上の女性と結婚、北海道へきて炭焼きや農業で寝ずに働くが、その日の食べ物にも困る。子どもの出産どき助産婦さんをお呼びおカネがなく、土間に敷いた藁に妻を寝かせ、二十歳の父が子供を取り上げて、産湯をつかかせたという。六人の子供全部、父が取り上げた。その父の巨大な手のひらの中に寝て産湯につかっているぼくの赤ん坊の姿が、いまぼくに見える。年の瀬の雪が降る。しんと降る。

また新しい年が来る。

①